

# からから 便り

## もくじ

- まちセンまつり 2025 参加レポート
- それぞれの「ここから」物語
- 寄稿「1 ページのたより」
- 各相談窓口
- 北海道における被災避難者の受入状況
- 編集後記

道南の約70の市民団体やNPOが集結したまちセンまつり。活動紹介や物販、ステージ演奏で賑わう2階会場の一角に私たちのブースがありました。私たちが、せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」(以下、わすれん)との協働企画、「9月6日ブラックアウトのなかで—なに、食べた?—3月11日の記録を手がかり



建物内には、東北以北最古の手動式エレベーターが現存。今も搭乗できます。

函館市地域交流まちづくりセンターは、1923(大正12)年に丸井今井百貨店函館店として建てられた、鉄筋コンクリート造りの歴史的建物(左写真)を活用し、市民活動団体やNPOの活動拠点として2007(平成19)年に開館しました。東日本大震災では、支援団体の活動拠点としても利用され、2024年まで3月11日に献花台を設置していたのもこのセンターです。

函館市  
地域交流  
まちづくり  
センター

まちセンまつり  
2025  
参加レポート



声をかけるとその方は「私ね、震災のとき、遠野(岩手県)にいたの」と話をしてくれました。遠野といえば、沿岸部への後方支援拠点として知られた場所です。あの日の夜、県内全域が停電の中、一緒に避難した人と見上げた星空にまつわる話や、知人の息子さんが沿岸部で津波に遭い、今も行方がわからないことを話すうちに涙ぐみ、「だめだめ、私は元気ださなくちゃね!」と、ブースに戻って行きました。



会場には、からから便りのバックナンバーのほか、わすれん!記録映像の紹介や、みなさまにお送りした「インタビューシート(東日本大震災のこと)」も設置しました。

に」のポスターや、来場者に自分の経験を書いて貼ってもらったためのふせんやペンを用意していると、隣のブースの方がじっとポスターを見ていました。

の時のことをふせんに書いて貼ってもらいました。しばらくしてその方は、一緒にまちセンまつりに来ていたご主人の車椅子を押して、もう一度ブースに立ち寄ってくれました。この日、胆振東部地震だけではなく、会場で出会った方々の東日本大震災にまつわるお話も聞き、記録に残すことができました。約400名が来場したイベントの開催は4時間でしたが、十数年の年月を行ったり来たりした1日でした。

## 「9月6日ブラックアウトのなかで—なに、食べた?—3月11日の記録を手がかりに」

震災時の「食」にまつわる写真をきっかけに、当時の体験や思いをふせんに書いていく、「わすれん!」の参加型展示「3月12日はじまりのごはん」。その写真やふせんを手がかりに、胆振東部地震のできごとを思い出し、体験や思いを記録していこう、というのが「9月6日ブラックアウトのなかで—なに、食べた?」です。

### ◆今後の展示スケジュール

- 8月26日(火)~9月25日(休) 期間中常設  
市民活動プラザ星園1階 カフェスペース
- 10月4日(土) 芋煮会会場(同上)
- 11月2日(日) 旭川「秋のCoCoDeまつり」会場

9月6日  
ブラック  
アウトの  
なかで  
なに、  
食べた?

~3月11日の記録を手がかりに



3がつ11にちを  
わすれない  
ためにセンター



# それぞれのここから物語

《道庁職員編》

今年の「それぞれのここから物語」では、北海道庁でさまざまな支援の組み立てや支援策の大きな転換を経験した当時の担当職員にインタビューし、これまで北海道が行ってきた支援を振り返ります。



平成23（2011）年3月18日

5月中旬

道外被災県緊急支援対策本部所属  
（現・北海道総合政策部航空港湾局  
航空課 新千歳空港周辺対策課長）

永田浩幸氏



北海道の避難者登録数が最も多かったのは、震災後最初の夏、平成23（2011）年8月の3220名。道内各地でこれだけの避難者を受け入れるための支援体制は、どのようにつくられていったのでしょうか。今回は、発災から1週間後に立ち上がった「道外被災県緊急支援対策本部」の初動メンバーのひとり、永田さんに当時の様子を伺いました。

「3月11日は平日だったので、庁内で仕事をしていました。大きく揺れた気がしたので『今、揺れたかな？』と周りの人に聞きましたが、だれも気づいていませんでした。その後、庁内でもテレビがつけられ、被害状況がわかってくると、何かやらなくちゃいけないけれど何をしたらいいのか、帰っていいのか、残ったほうがいいのかもわからず、ゾワゾワした落ち

着かない気持ちでいたのを覚えて  
います」

発災から約45分後、知事を本部長とした北海道災害対策本部が設置され、災害対応が取られました。そして、1週間後の3月18日、災害対策本部とは別に、支援を目的とした「道外被災県緊急支援対策本部」が北海道庁の「総合政策部」に立ち上げられました。「総合政策部」は、北海道の総合的な企画や調整、地域振興に関するを行う部署で、道外で起きた災害支援の経験があったわけではありません。

「道庁内には、誰かが何かしなくでは、という思いがたくさんあったのだと思います。騒然としている中で、当時の総合政策部の地域振興監（部長職）が『やるぞ！』と立ち上げたのが『道外被災県緊急支援対策本部』です。年度末で事務も錯綜する中、この本部の下に、部内から10名、保健福祉部、経済部、建設部、農政部から各1名が集まり、突貫でチームが作られました。マニュアルやノウハウもない中手探りで、みんなで被災した方々が置かれている状況を想像しながら、支援の内容や方法について意見を出し合いました。アイデアは錯綜し、今思えば空回りしていたこともあったかもしれませんが、『北海道被災避難者サポート登録制度』とネット

「もメンバーのアイデアから生まれたものです」

対策本部が立ち上がったからは、道内への避難に関する道内外からの電話がひっきりなしで、2名が半日交代で対応に追われ、夜遅くまでかかることもありました。やがて、専門職員が対応するコールセンター機能を作った方がよいのでは、ということになり、相談にあたる臨時職員を雇用し、3月23日（水）総合相談窓口を設置、運用時間は8時30分～22時00分、土日祝日も受け付けました。

「（当時はまだ珍しかった）ペットと一緒に避難できますか、と問い合わせを受けたこともありまして。毎日、なにかやらなくては、という思いに駆られる中、少しずつ北海道に避難される方が増えてきました。そして、ミーティングの中で『せっかくな北海を選んできてくれたのだから』と、支援物資の中からいくつか選んで、避難生活に応援セットみたいなものを送ろう、という話になりました。支援物資は被災地に送るためのものですが、道内に避難をしてきた被災者に届けても問題はないだろう、と。そして、世帯にお子さんがいる場合には絵本を入れるなど、少しでも気持ちが伝わるよう、みんなで工夫したことを覚えていました」

チームの中で永田さん自身は、被災地への物資支援の担当でした。道民から物資を集め、被災地へ届けるための仕組みをつくり、受け入れ先を探して届ける。集めるものは食料品、日用品、絵本に限定し、3月28日から全振興局で道民からの受け入れを開始、4月1日に被災地に向けた第一便を送り出しました。こうした物資支援は5月には落ち着き、永田さんは通常の業務へ戻りました。

「自分は物資支援担当でしたが、隣に受け入れを担当する職員がいたので、住宅の確保やふるさとネットの仕組みづくりをしていたのを覚えています。避難された方へ物資を送るとき、相談窓口を担当する専門職員が、自分が倉庫から持ってきた絵本を選定していました。聞くと、津波や洪水を思い出させるようなものはやめた方がいいから、と、水が描かれている本を抜き出していました。自分はそこまで配慮はできていませんでしたが、みんなそれぞれが、それぞれの立場で被災者の心情に配慮していました」

支援物資が被災地に向けて出発したのと同じ4月1日、新たに、「道外被災地支援グループ」が立ち上がり、避難者の受け入れや支援策の企画を担うことになりました。「道外被災地支援グループ」は、平成29（2017）年度まで続きました。





寄稿

# 1ページのたより

東日本大震災の発生時、私は夫の転勤先である仙台市に住んでおり被災しました。地震への備えはしていたため、地域の方々と協力しながら何とか過ごせましたが、福島第一原子力発電所の事故が発生し、被曝の恐怖に襲われました。私は化学物質過敏症という障害があり、小学1年生の長女には重度のアレルギー、さらに1歳の長男も抱えていました。放射能が子どもたちにどのような影響を及ぼすのか分からず、恐怖の中で、3月19日に北海道へ避難しました。

自主避難といっても、私は北海道出身です。生まれは知床、父方のルーツは宮城県登米市。東北と北海道の両方に縁を持つ私は、まるでハイブリッドのような感覚で、ふるさとに帰るような安堵と、未知の生活への緊張感の両方を抱えていました。

当初は知人宅や実家に身を寄せましたが、避難生活が長引く中で、札幌市厚別区の避難者住宅を借りることになりました。「実家に避難できたのになぜ」と問われることもありましたが、当時テレビは事故を過小に報道し、ネットで情報を集めていた私を両親は怪訝に思い、軋轢から大喧嘩となり、母子3人で途方に暮れました。避難者向け住宅制度を

知ったときは、本当に救われた思いでした。そこには、身寄りもなく、子どもの命を守るために勇気を出して自主避難した多くの母子が集まっていました。

ある時、住宅内で悪質な嫌がらせが起き、多くの母親が不安に陥りました。私は福島から避難してきた一人の母さんと協力し、住宅内に自治会を設立。副代表となった私は、見知らぬ者同士だった私たちが助け合えるように働きかけました。38歳で避難した私にとって、そこで出会った仲間や支援者は、過酷な経験の中で唯一の救いでした。

た生活も落ち着き、小さかった子どもたちも成長しました。事故から14年、当時の辛さは少しずつ癒えてきましたが、決して忘れることはありません。

られ、自主避難を選んだ人々は生活も人間関係も失い、深く傷つきました。

どうか仲間の皆さん、これからもずっと仲間でありましょう。時折集まり、顔を見合わせ、笑い合いましょ。必死に原発事故と向き合った私たちです。きっと長生きできます。（あのばーさん、まだ生きてるのか！と言われるくらいでちょうどいいのです。）

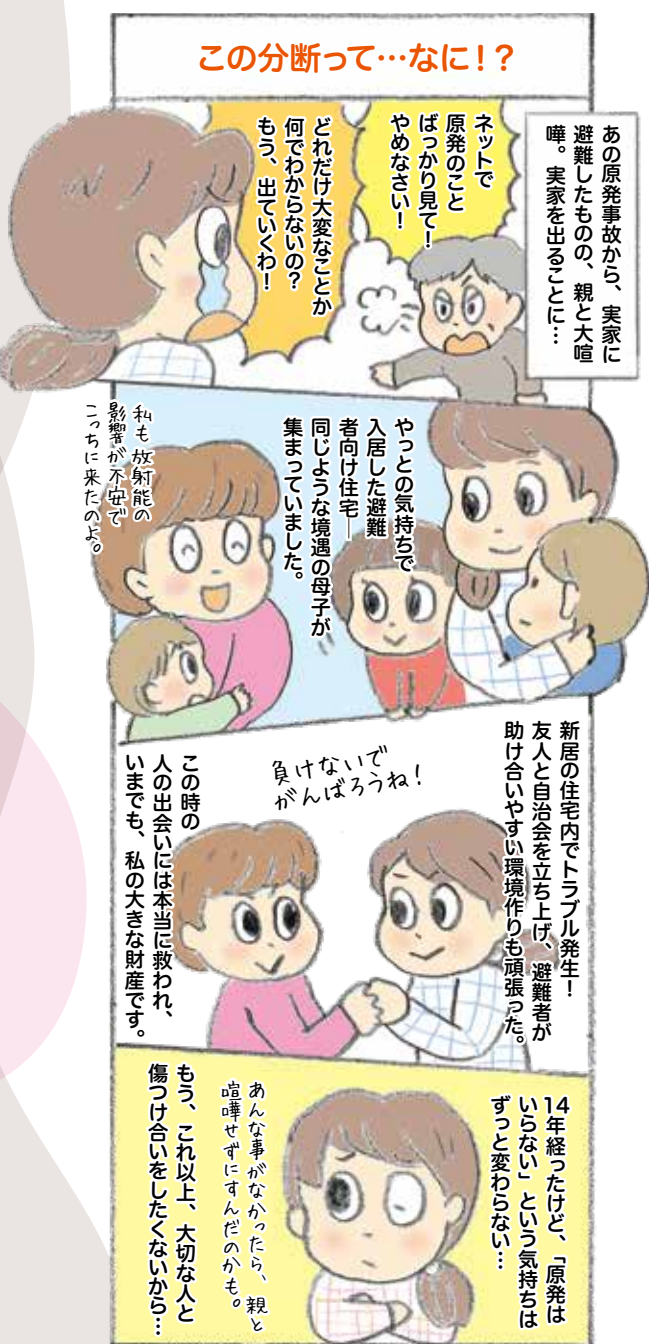
そして、「ほーしゃのーはあぶないからだめ！と、子どもたちや孫たちの経験を無駄にせず、未来へとつなぐ力になると、信じています。

現在、私は北海道十勝の新得町という、空気と水のきれいな小さな町で暮らしています。体調を崩している

私が生涯をかけて伝えたいことがあります。それは「原発はいらない」ということです。あの過酷な事故の後でさえ、この国は原発依存をやめていません。ひとたび事故が起これば、人の暮らしも地域の絆も、未来への希望までもが奪われます。

原発事故は、社会に大きな分断をもたらします。多くの人は地元に残る道を選び、「直ちに影響はない」という宣伝に惑わされました。真実は巨大な資本の力で容易にねじ曲げ

（小祝美雪）



この分断って…なに!?

あの原発事故から、実家に避難したものの、親と大喧嘩。実家を出ること…

ネットで原発のことばかり見て、やめなさい!

どれだけ大変なことか何でわからないの? もう、出ていくわ!

やっとの気持ちで入居した避難者向け住宅。同じような境遇の母子が集まっていた。

負けないでがんばろうね!

この時の人の出会いには本当に救われ、いまでも、私の大きな財産です。

新居の住宅内でトラブル発生! 友人と自治会を立ち上げ、避難者が助け合いやすい環境作りも頑張った。

14年経ったけど、「原発はいらない」という気持ちはずっと変わらない…

あんな事がなかったら、親と喧嘩せずにすんだのかも。もう、これ以上、大切な人と傷つけ合いをしたくないから!

手を取り合いながら、未来と一緒に歩きましょう!



東日本大震災の影響により  
道内に暮らしている方の

## 相談窓口

TEL 011・200・0973

NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター

平日 10:00~17:00

FAX 011・200・0974

✉ info@hnposc.net

〒064-0808  
札幌市中央区南 8 条西 2 丁目 5-74  
市民活動プラザ星園 201



地下鉄東豊線「豊水すすきの駅」  
6 番出口から徒歩約 7 分  
地下鉄南北線「中島公園駅」  
1 番出口から徒歩約 5 分

メールや FAX、  
お手紙でも  
ご相談ください

岩手県、宮城県、福島県が設置する  
相談窓口はこちら。



### 岩手県

いわて被災者支援センター

電話 019-601-7640 (平日 9:00~17:00)

メール info@sumaiansin.net

### 宮城県

宮城県復興支援・伝承課

電話 022-211-2424 (平日 8:30~17:00)

メール denshoh@pref.miyagi.lg.jp

### 福島県

ふくしまの今とつながる相談室 toiro

電話 024-573-2731 (月・水・金 10:00~17:00)

メール toiro@f-renpuku.org ※祝祭日の場合は休み

## 北海道における被災避難者の受入状況

下記の避難者数は、復興庁が公表している「避難元へ帰還の意思を確認できた方」の数です。なお、北海道庁では、さらに幅広く「ふるさとネット」(右記参照)に登録しているみなさまに、お知らせ(本紙)をお届けしています。

〈からから便り郵送世帯数(避難元別): 岩手県16、宮城県63、福島県172、その他32

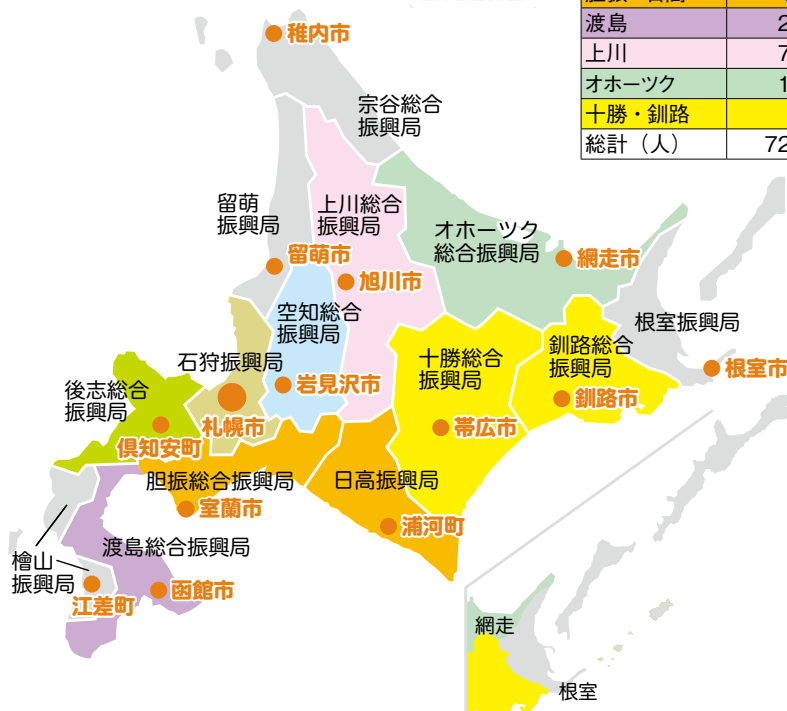
※2025年8月末現在

市町村別の受入状況は、北海道の  
ホームページからご覧いただけます。



2025年8月1日現在

空知	28
石狩	504
後志	31
胆振・日高	48
渡島	22
上川	74
オホーツク	14
十勝・釧路	8
総計(人)	729



## 全国避難者情報システム「ふるさとネット」 の登録について

「からから便り」は「ふるさとネット」の登録情報をもとに  
発送しています。「ふるさとネット」は北海道が運用する被  
災避難者サポート登録制度です。この制度は自治体の転  
出入届とは連動しておらず、転居の場合は住所変更のご  
連絡をいただかなければ、郵送物が「所在不明」として  
返送されてしまいます。転居、登録解除など、「ふるさとネ  
ット」の登録内容に変更がある場合はご連絡ください。

### ■連絡先

① NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター

② 北海道総合政策部地域創生局地域政策課

電話: 011-206-6404

メール: shienhonbu@pref.hokkaido.lg.jp

③ 避難先市町村の担当窓口

(市町村により部署が異なります)

## 編集後記

函館に行った日は、テレビ番組「プラタモ  
リ」の函館ロケの放送日でした。せっかく函  
館にいるのだから、と視聴。すると、翌朝ぶ  
らぶらと散歩している時も、地域交流まちづ  
くりセンターに行く途中でも、「あ! 昨日テ  
レビで見た!」の連続でした。少しでも歴史  
背景を知っていると、同じ景色も違って見え  
ますね。(金榮)



道内避難者心のケア事業

ウェブサイト: https://hnposc.net/311\_hokkaido

からから便り Vol.2 ■ 2025 年 9 月 15 日発行

発行: NPO 法人 北海道 NPO サポートセンター

〒064-0808 札幌市中央区南 8 条西 2 丁目 5-74 市民活動プラザ星園 201

電話: 011-200-0973 FAX: 011-200-0974 メール: info@hnposc.net

委託元: 北海道

お預かりした個人情報は、避難者の生活支援のために利用するほか、出身県へ  
の提供など限定した目的にのみ利用し、その他目的には一切利用いたしません。

### 【無断転載・コピー】

本紙掲載の写真・図版・記事などを許可なく無断で転載することを禁じます。